

心より西の如くは物とて此物とて此の如くは月の方を
八右

隆博

ふのこゝに入るぬをさかしてさうさうの情とて
あふ

あふよりさかしてさうさう有様方より

中あふ持

あふよりさかしてさうさう有様方より

あふよりさかしてさうさう有様方より

あふよりさかしてさうさう有様方より

あふよりさかしてさうさう有様方より

あふよりさかしてさうさう有様方より

龜山殿五之河秋合 文永二年九月十三夜

河秋合

野鹿 山紅葉

不逢恋 絶恋

作者丸

女房

前園白 良實公普光園入道前園白丸大臣

右大臣 基平公深心院園白前左大臣

兵部御藤原朝隆親

權大納言源朝臣通成

權中納言藤原朝臣長雅

參議源朝臣資平

右近權中將藤原朝臣具氏

真觀

中納言

右

關白 實經公後一條入道前關白左大臣

前太政大臣

前左大臣 實雄公山階入道前左大臣

前大納言藤原朝臣資季

中宮左支源朝臣雅忠

融寬

中納言藤原朝臣為氏

侍從藤原朝臣行家

右兵衛督藤原朝臣為教

左近中將藤原朝臣公雄

講師

左右近衛權中將源朝臣具氏

右侍從藤原朝臣行家

讀師

左 右大臣

右 前太政大臣

判者

衆議判

一番 河月

左 持

右大臣

右 右大臣のふれもきく大井河本乃縣と月の子ひも

かきふいと君のふれもきく大井河本乃縣と月の子ひも

左方
三親

左 秋篠御孫中之任兼曆例方人先丁

詠吟之由被任仍森抄詠吟之次右秋篠

御孫中之右方人詠吟之次各丁申是非之

由有申事云云左方中左守下白同右守

又上之二句非詠左方中詠右秋同御也

勅先規一書ある同承之河邊左為孫

右示秀造之河為孫云々右秋を孫事

先右任先例てわら左勝をた又中かきう

傳と君のらと也為孫言之上初句は河

月之數有便宜之朝也右持非各例争

丁員外左方重難云の言丁はす其為夫之

款非月之光毫芥影之奉念於然而
祝言於難寢止之由右方類依文中於
被定持

後為羽院法時亦合後成判云其下
亦合乃例として一書可及左持右
主つはつ子河持ははつ子すうり載之
右方合中持之執被背皮判云款

右方
融覺

左右禱師傳中平各祿以之遂可中
存知之由被作下右意中而首初方二句
之外周款は不持方之由中之左方

二書

一書左類込て為持之由被作下右意の
子とせ乃大の河難定其を左右花下
為持之由定中

左持

前圖自

為代は清くあふし月も照らすとくは於き地の後河
右

遊とていふ事は事行のたはる事有ひすはす

右方左款は相侵する由中と之を右持
万葉集の故のまゝとて是れは河をさす

あつたつては後乃ら方つてまてわ侍らんを被
 任出のまもきこつてははれと侍後云位
 申之けの字とてめて後同もまもつて
 けよのまもつてははれと侍後云位
 もんははれ乃葉集のまもつてははれと侍
 難を之由る物定大國被申云今見左
 云々思はれは定名右方作名を難を
 申信下有侍まもつてははれと侍後
 劣者被不て論之仕奉る物定被下
 申子細早は危下為侍

云番
 右勝
 通成卿
 左方より申候男もまもつてははれと侍
 雲は後川花宮の之由ははれと侍
 後申候難はれははれと侍
 左方申候

右
 前太政大臣
 大内内も此の水は終て有るまもつてははれと侍
 右方申候もまもつてははれと侍
 申之けの字とてめて後同もまもつて
 けよのまもつてははれと侍後云位
 もんははれ乃葉集のまもつてははれと侍
 難を之由る物定大國被申云今見左
 云々思はれは定名右方作名を難を
 申信下有侍まもつてははれと侍後
 劣者被不て論之仕奉る物定被下
 申子細早は危下為侍

此月あるをいふを侍連とて同て侍連をい
 左方おふの河のせに乃水ありて
 きたりて連たるまを左方有るもあまき
 ね思信秋水よりぬけりてきりて
 してもたれ光のたれをまきりて
 ばさりてきりていりて子世の教えお
 ありて左方よりいりて左方為侍連と
 かし光中

左
 右

資平卿

今更に侍連のなをいひて左方侍連のむね

右膳

雅志郎

本并に侍連のなをいひて左方侍連のむね
 左方西園寺入左前太政大臣家月十
 三日名所付侍連ありて侍連
 三侍連のなをいひて左方侍連のむね
 もあ左方侍連のなをいひて左方侍連のむね
 おりて侍連のなをいひて左方侍連のむね
 侍連侍連彼月十日侍連のなをいひて
 侍連侍連侍連侍連侍連侍連侍連侍連

とてさすしゆりさる可為道之段夷を之
由るゆは右為播

右方と想の妹の名を河を深くゆか
しそこの敷きりさだは左敷よ其のしよ
播きゆきりし

五番

左播

長雅齋

竹河のすぢのりも百のりも敷とて月のみまをりし丸

右

資書齋

大井河のすぢのりも百のりも敷とて月のみまをりし丸

左前園のりも百のりも敷とて月のみまをりし丸
はらひわと右方りゆりしと年敷もさる
なることゆは道は月の光さるわらわらし
きよとさるることわらうゆりしと前建に之
比敷合は河月仙氷といふ敷とて今守の
ゆりしゆりしと左方りゆりしと右方りゆりし
はらひしと右方を先侍ゆりしと竹河の敷
と案もさるることゆはゆりしと出持と
たわらゆりしと建仁元年八月十日を敷播
秋合河月仙氷後成台女

大井河内をさすともとの全をみりとはな
 らてしめる月の二つをねるは未定格
 傳へるはあまのむすむす
 新勅光の雲をい入道前持政とすはあま
 との葉葉れ君のうへまのあてて君名
 とまきしるるれ左もひら下む傳をり
 右のあま出傳くと古教と伝え及下
 傳之由後日枝伝下とる裁とる者也
 右方中よ及の来むまうとあまはうり左
 方中よる二ふあまとるあまは神也とる文

六番

と勝

女房

りつりつと下為持く由西方へ

紫衣有る事と飛鳥河七津の流よとすはん
 右

么雄卿

そら歌子細く世はるる

右方中如らうとあり〜母にまはれり

く〜世に〜ふ〜と〜とおろむて〜

優劣〜申す〜右歌左方より〜

〜の〜出〜たる〜舟〜舟の〜字は

童子如〜〜〜〜〜

見よ〜ま〜う〜よ〜世〜年〜も〜い〜

〜ら〜る〜は〜ら〜り〜海〜中〜舟〜の〜舟〜

代と〜し〜事〜は〜ら〜り〜さ〜も〜小〜威〜は〜ら〜る

〜し〜と〜た〜ら〜り〜と〜舟〜外〜年〜長〜

〜は〜ら〜る〜も〜と〜ま〜く〜お〜ろ〜む〜と〜

〜と〜老〜者〜と〜し〜れ〜た〜ら〜り〜さ〜も〜

〜は〜ら〜る〜も〜と〜ま〜く〜お〜ろ〜む〜と〜

八番

左膳

沙弥真観

初瀬のわたり〜舟〜は〜ら〜る〜と〜

右

為教卿

為代のなほのつらき光とやのまはのの月のみすはる
右の波のどころもあつた月は

いさかきまじり侍と力禁よまほさや
けさのなをうと清とて字成書てまわ
守侍の侍侍まはらるるやまも陳く侍
ましの入る氏初もまらりよも中侍連
し若妙くくもや右奇まあつた光
ままあつたくくもやまもまもまもまも
侍侍ま

九番

左

具氏胡臣

初ら海門吉野れにるまの地まよまもあつた月

右勝

前左大臣

くうたのあもる月の桂河輝るまのひの名ふなれつ
右方左下白優なまひ速秋るまうけん

ほくろ振るそ傳進し申傳と奉致の申進
とあらぬやうに傳進し月の為とて
おのゝ高傳とあらうひて

右前又常乃とて月のうららひとて
秋の傳りゆく中らひ傳りて例今うけ
見倍の人となりて芳野之清澄とて

けて桂川の佐右兵衛とて傳りて
乃お裁合暖誠望とて起て幸くも

乃お裁合暖誠望とて起て幸くも
色ありまきさうとてはとて世に
乃お裁合暖誠望とて起て幸くも

乃お裁合暖誠望とて起て幸くも
月のおく河まらりまはれも十二
乃お裁合暖誠望とて起て幸くも

乃お裁合暖誠望とて起て幸くも
乃お裁合暖誠望とて起て幸くも

為橋

十高

左勝

隆親卿

風もふるまはれお水もあつていよくまよ地月ののりも

右

新巻御

大井河未いりらぬ守とてあをゆく有りますまはるん
な中左守いよくまよ地月ののりも

くわ右弁上白らるるわこつたあて
左心ゆく後侍りき

左欽これ河もすくものをくわと右
より中出し侍りし急大の河志もいふ
所より心そはされをうい孫勝と定めし

十一番 野鹿

尾持

通成卿

おつたの野風とまを離れあはぬわらう麻や鳴らん

右

為氏卿

まうら野原れえ地維輝もいぬお麻ねたるあ

あそくあおちしすもいし侍りてまうら
野風荒涼やわとた方中せとた百ね
くまの蜂もといはれあひし侍りて
して不丁も後方より由中之仍以爲持
左右に侍りし両も後方よりし侍り
またかき侍りしまうらもいし侍り
荒原も侍り

十二番

尾持

女房

神もすやあはれえとあはれえ世世はし麻ねる

右 融覺

志心深誠の業ある處より好まざる所ありて
志中標野の業程の心程及詞程及く

由満中との

右秋老の心深誠野作志程心

由去之由きたりて左志心程心

作程心程心程心程心程心

志心程心程心程心程心

系極極改程心程心程心

しういふがこれ陳方なりて左志心程心

無しとも右方中作り志心程心

古秋之上左蒲生野遊揚の面程心

とたらしうひて仙程心程心程心

十二番

左 真觀

志倉れりあふりりあふ雲の程心麻程心

右 結 関白

志心程心程心程心程心

左秋下白續後撰あり

結心程心程心程心程心

素と云ん世歌もあらずきり侍従中納
言中之真觀中云麻の素と云りいなる
ては上白とありぬはあはれとありて侍
従も用ひありてあはれ侍らん大前にも
月歌侍りすもと名はれん少燈使なる侍
もよしとて万葉中七卷壁喻守もて
世方にありてもあはれ侍りて風情幽
致して奉歌りりりひて侍りたる
たふ野ありやほなりとて古來は雑依
也といふ被侍也入る民部といはれ

存初するともわと世はありし、初は
之由中之必極秘事といはれ野之り
不被受してその侍負難より定やら
侍りて侍従之位信法固之野志や
能因そはれもたつらりやその一
つまにひるの爲侍り由被定は
左よるとやなりすも侍りたる
かりて左方小陳中より侍り侍り
かやうに侍りて名はれり侍り侍り
く侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り

かうくはく優もみえ侍さるる上は
萬葉集秋津世の雲に河もみくたら
侍りしはまもさるるもみく侍りし
いふももも右侍侍りし

十江書

左勝

前園白

春日野のあしはるる風をかくともほくぬ侍麻の夢

右

為教場

雙いさ藤原乃布北原の道にまの道に藤や鳴らん
左方よりあけて右袂末禰中之乃水兼お合

小春日いさあしはるる風をかくともほくぬ侍麻の夢

二条園白中子道にれく空路入道園白白

いさよこらるるもみく侍りしはまもさるるもみく侍りし

色氏長者藤原のあしはるる風をかくともほくぬ侍麻の夢

押て月勝字は右袂由大同被中之右方

いさよこらるるもみく侍りしはまもさるるもみく侍りし

然下白ゆきまもみく侍りしはまもさるるもみく侍りし

ちとく人こちあひて愛麻乃詞公日の光

あはれいさあしはるる風をかくともほくぬ侍麻の夢

あろくもみく侍りしはまもさるるもみく侍りし

つまじくしと春日将とあしつるいよ
も早しうらふまよつはとてい左の橋

十六番

凡

中納言

秋の霜の草束おち移麻糸のい建は素あやあつた

右勝

行家卿

秋の霜の草束おち移麻糸のい建は素あやあつた
左袂下白き同形をく由右方中右方
本年もあつてし朝侵ちあ移あつと
し勝もはくはるふ

右方下左方かやうはとをく同くはるふ
ゆあやうて右勝ゆきを左方中右方
おし後日よちて被たのく被連と衣笠同
大后百そまといひてふくや麻糸の後
てはるふ

十六番

左勝

具氏朝臣

とあつたまあやうふ麻糸のい建は素あやあつた

右

前左大臣

あつたてあつたのく被たのく被連と衣笠同

古方中なるの事なましくほりて優劣を以難く
傳しと本款ありてくわきりて傳せしむ
作出りて右款より方為人なり難ありて
傳しりて下白津製也て左端小なりし
左款をとりていふと傳くはりてさうなく
麻乃あまのりよきりてりてりてりてり
中、た、傳、り、も、左、腕、傳、り、ま、

十七番

左持

右大伝

其の子葉の如く掉廢の波もあまるとりて藤原

右

資季卿

やまきりてりてりてりてりてりてりてりてり
左款初なる字を右に非伝るに入る氏
初の中之の藤原志のまきりてりてりてり
かゝる人の如きりてりてりてりてりてり
まきりてりてりてりてりてりてりてりてり
優劣の如きりてりてりてりてりてりてり
まきりてりてりてりてりてりてりてりてり
藤原、優、劣、を、り、て、り、て、り、て、り、て、り、
由、り、て、り、て、り、

十八

尾

隆親卿

あまも又きのなをぬらんすてありのこりりる尾

右橋

前太政大臣

よまろくおひく整束し流分をわきまを麻打のり

左秋意なるこまよして河内優もそゆること

まのましとらるお字をよおるいひひひ

右方籍のゆるい麻の抄るぬのりなり

ぬいひこまおまじれも又もたひひひ

おそこまおまじれも又もたひひひ

某と初家つらみて新古今よい進め行旅

はいつ冊白と難をじと被仰り進め

こゆりて中なるりもまたおの秋をらる

こもてうねりもまたおの秋をらる

左方より可被優を由りされゆるり

おそく宜くして橋と被定てゆるり

十九

左橋

長雅卿

子守も雅子のらん高角のうへりるお抄

右

雅忠卿

船をくねりしりれ葉のあやうへつら後ろ野邊に秋芳
 ち秋葉と先とひいてはまらしつら秋葉八雲
 乃臨まともひやれといわく船をくねりある
 や麻のあやひあいたるもつらなうのあやを
 侍らんと左方こそと難く侍り後ろ左秋葉の
 きこらむまといひやあたるもつらなうのあやを
 のろくつらあち秋葉の難中へ秋のつらなう
 ようくつらあち秋葉の難中へ秋のつらなう
 ひとのあち秋葉の難中へ秋のつらなう
 変るつらあち秋葉の難中へ秋のつらなう

二十番

右持

美の葉は建物の秋風たたくつらなうの麻のあやを
 右持
 子持のあやを建物の秋風たたくつらなうの麻のあやを
 美の葉は建物の秋風たたくつらなうの麻のあやを
 子持のあやを建物の秋風たたくつらなうの麻のあやを
 美の葉は建物の秋風たたくつらなうの麻のあやを
 子持のあやを建物の秋風たたくつらなうの麻のあやを

卷二百二

五十一

由彼任出たる吾不干被降之由中之仍左
勝之由承傳しし持て傳る

九一由 山和葉

右持

あまのりよ海とく不山神代もきるぬをみゆらん

右

あまのりよ若らつらも小念の深の海にえともらめり

あまのりよ若らつらも小念の深の海にえともらめり

あまのりよ若らつらも小念の深の海にえともらめり

あまのりよ若らつらも小念の深の海にえともらめり

あまのりよ若らつらも小念の深の海にえともらめり

あまのりよ若らつらも小念の深の海にえともらめり

あまのりよ若らつらも小念の深の海にえともらめり

あまのりよ若らつらも小念の深の海にえともらめり

あまのりよ若らつらも小念の深の海にえともらめり

あまのりよ若らつらも小念の深の海にえともらめり

あまのりよ若らつらも小念の深の海にえともらめり

あまのりよ若らつらも小念の深の海にえともらめり

あまのりよ若らつらも小念の深の海にえともらめり

あまのりよ若らつらも小念の深の海にえともらめり

秋之道と云ふ求兵諭諷判之吉神治國
 格民之政作んは志あるの要樞といひ
 是は合和ぬま好儉之文被述我辰施
 徳之仁志つゝよふまはるまはるまはる
 も作のれ左の常れまはるまはる右方作
 と神代のもはるまはる神代もまはるまはる
 里なせまはるまはるまはるまはる
 上まはるまはるまはるまはるまはる

多き負作りて大岡被中もはるまはる
 まはるまはるまはるまはるまはる
 左方義理おけ花美共存むまはるまはる
 右方明王好候本文む能まはるまはる
 意具まはるまはるまはるまはる
 右方まはる被陳中まはるまはる
 被定

九二書

尾持

前園自

是の世の人をまはるまはるまはるまはる
 まはるまはるまはるまはるまはる

右

行家卿

山姫乃衣たつこのも地秋とこれ袖とゆせて
 右方あまうらら申る侍らるまはまはあ
 山あうらまをいひらうまうあひまうま
 ちあまのまを左方舞侍らる衣さ固と
 らあう山姫又山姫さるまはあひま
 陳中侍らる方も侍らるあまうらと衣錦
 袖あまのまはまあうまはまはまはま
 申侍らるまはまのりらことまらと勅定
 まはまは侍従と位とまはまはまはまはま

山あうらまをいひらうまうあひまうま
 ちあまのまを左方舞侍らる衣さ固と
 らあう山姫又山姫さるまはあひま
 陳中侍らる方も侍らるあまうらと衣錦
 袖あまのまはまあうまはまはまはま
 申侍らるまはまのりらことまらと勅定
 まはまは侍従と位とまはまはまはまはま
 山あうらまをいひらうまうあひまうま
 ちあまのまを左方舞侍らる衣さ固と
 らあう山姫又山姫さるまはあひま
 陳中侍らる方も侍らるあまうらと衣錦
 袖あまのまはまあうまはまはまはま
 申侍らるまはまのりらことまらと勅定
 まはまは侍従と位とまはまはまはまはま
 山あうらまをいひらうまうあひまうま
 ちあまのまを左方舞侍らる衣さ固と
 らあう山姫又山姫さるまはあひま
 陳中侍らる方も侍らるあまうらと衣錦
 袖あまのまはまあうまはまはまはま
 申侍らるまはまのりらことまらと勅定
 まはまは侍従と位とまはまはまはまはま

北守易
尾勝

中納言

山形乃字ありあけの河由てい

右

松のおしるの字のりから葉
左様を頼りてくまのりてしうた後あり
と侍従之位に出侍りてるものなりは
やう中よりまじりて右ありと左方あり
何とやらん難とくまのりてしうた後あり
はるやめ右ありとはるる左方ありとくま
いさすくと左方ありとくまのりてしうた
左山より岩の寛平初判と治下将人

後多不難之を随又右方無り右傍る為
謝後難哉此子細者也左ありとくまのり
云く由各中為務出候

北は中

尾務

女房

外より河由のりあけの河由てい
右
為氏卿

志とてあけのりあけの河由てい
右方中ありあけの河由のりあけの河由てい
すてあけのりあけの河由のりあけの河由てい

各々連中右心一月蘇吟敷迄元以銘也
也右秋おるしともある外字こいしくたを
方人申侍りやん性もあやしく侍りす
右心たるはま秋もあまをそ左雲泥の
侍り定らる右心侍師候あけ侍りあ
浦度蘇吟名及右心より沙汰為侍

北云書

左

隆親卿

暖城のこみ世に草乃まを人のいふ河もまは葉深し侍

右侍

前左大臣

あ〜山あやめあめは遠もははま葉に深し侍
右秋と二白定家心人守り申入る民初々
申之右心多れらるる侍りあまを
侍りあまを侍り侍り侍り
左初二白新古今定家心人守り申入る
よちあ〜山あやめあめは遠もははま葉に深し侍
さの色も葉を深し侍り侍り侍り侍り

北云番

左

長雅卿

うらまはるるを侍り初河由まはるるの秋あから葉

右膳

前太政大臣

小倉山見りてうらやまうして雲のうみゆる梅舟の舟く
 左舟初白うらつてもうゆるお撲とみちあたら
 すした方申しとらほきよのれをかるまきふ
 とらふをともよりみくゆるともれらふ一室
 由は氣もともゆるとも右舟雲井もみゆる
 秋のおもやゆきけしこゆるこそ古徳くらり比
 右舟のりりりんたる秋ののりら葉をを
 とふゆるりよな尾もゆきこふに本致れと
 はるきとも優ちとては右為膳

九七書

左持

真觀

とらふとてひも河由をみゆるはゆきはゆきと
 右

右

公雄卿

あめのみまのあうれらるまのゆきもゆきよめおめ
 左舟右方とかく中なるゆるすた方難を
 くと由沙結あわて持とつためまきくおふ
 傳ふまきとらるんゆる
 左の少倉山とらふい乃本致乃の思之
 ぬかしくいゆるも右舟あうらふ山

の多し *か* *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

か *は* *い* *ま* *は* *ら* *し* *ま* *の* *ま* *た* *り* *な* *る*

巻二百二

五十八

未句のうらみかゝりて持て被定するがの
しつゝも傳進ら合新作者も先規より
せて蘇之を吉者無罪祖不依以前例
於て向後之儀を

左様す新さぬいさうり用定ありてり

少やと申出ゆしや右様を考むは異方
少てゆかりて勝字よりへり

二十番

右持

資平卿

と河内由し其書ともしおてし傳りての下お集り物

右

資季卿

多くは傳りてありしは流人となりての山風本とのお集り
おり左様紅葉不足をよりお集りての紅葉と
えとを傳りんと入道民初ら申傳りてお集り
お集りて守おりてよむしはさうもあつた歌と

うしにらんとすちた方難あてりるるるる
 歩官を信りき事難も月とくたれくして
 そは古分人林の初も入る信世よおま
 ともひきう先くつうくろ中おまする後小
 してち後の初うく此さるるまんとたあよ
 ひとく軽中信りき事あてりるるるる
 あやろさるる難も数人おまてみしてお持
 又よりくしてお信り信り神とて友の世款合ら
 左の方とあてりるるあてり神定して出
 きたりて定信り神り神り神り神り神り

只あてり神り神り神り神り神り神り
 ひとくち神り神り神り神り神り神り
 たり方と信り神り神り神り神り神り
 七陳方かくくお信り神り神り神り神り
 為たりてお信り神り神り神り神り神り
 左款山お信り神り神り神り神り神り
 右方とあてり神り神り神り神り神り
 ひとくちお信り神り神り神り神り神り

三十一

不達意

左膳

真観

最上りてはたなりしとてふもつる其の能くはしむ

右

行統卿

予は目撃しつゝいふに遠き事なれども余は其の能くはしむ
左秋能悪く由入道民約るゝとて其の能くはしむ
しむとていふに古秋とていふに其の能くはしむ
ふとて悪秋とていふに其の能くはしむ
其後にもいふに其の能くはしむ
けりといふに其の能くはしむ
おとといふに其の能くはしむ
とていふに其の能くはしむ

と左秋不徳之由る初左方中危の悪

乃奇とていふに其の能くはしむ

左方より初めたるものもいふ我はたかくしとていふ

本秋より悪くはしむとて左秋とていふ

二十二番

左

通城卿

かゝるもいふに其の能くはしむ

右

為氏卿

左秋より初めたるものもいふ我はたかくしとていふ

左秋より悪くはしむとて右方より之

侍從中納言之凡の官位あり侍人右
前未白より右侍の事と各中にて左
為攝

左秋の末よりしては後より中にて為攝

三十二

右大臣

いそあつし建武中北からあつしつ子せぬ終る人

右膳

融覚

いそあつし建武中北からあつしつ子せぬ終る人

左秋の末よりしては後より中にて為攝

入道氏部卿侍從中納言末よりしては
公雅中左方よりあつしつ子せぬ終る人
何強下の雅式ありしつ子せぬ終る人
優長よりあつしつ子せぬ終る人
もさつしつ子せぬ終る人
少治ありして後より中にて為攝
らまはしつ子せぬ終る人
たうくすえつしつ子せぬ終る人
つしつ子せぬ終る人

三十三

平尾膳

前圖白

はるばるとらつらつと風をこめてはるばる海をわたる

右

前左太伝

潮をうきつらふもあまのついでに

なまは古歌のよみ後伝出の撰集の序

未伝するもの右方入の伝はるゝ

後の河津とあまのついでに

あまのついでに海をわたる

初定伝はるゝ右方伝本承伏し伝はるゝ

左伝はるゝとるゝとるゝとるゝとるゝとるゝと

傳りしとを膳に被定るゝとるゝとるゝと

後引曲るゝとるゝとるゝとるゝと

あまのついでに海をわたる

たつ初絶るゝとるゝとるゝとるゝと

左より海をわたる

平尾膳

反指

具氏卿

あまのついでに海をわたる

右

圖白

くらゐ心袖をきつるゝとるゝとるゝとるゝと

左様にて未だぬはとあるまたの袖人
 の赤まきあまの御守を新秋といつて
 もはやくくまなうして侍をたて地持
 たるへいおんふのふゆ之
 右のふゆりくすくゆりもあまを新秋
 たるを侍と被定

二十六番

左持

女房

中よりまはるはくお返のふゆあまの國咄をうり
 たる方中云左様七条御をうり元及り死
 たるあまの御守もあひ侍りし不具人
 人のやゆえんく此奉秋の新初撰の定
 家の撰入く侍まてさたりて秀逸よとそ
 りく車と侍るものもあま車まて奉り侍
 りしも侍るはあまの御守もあまの御守と
 きて上料の侍るを侍るに申上侍り
 右守の中御守興るとは侍るありと
 ふはつとる御守七車よりあまの御守に

惟忠卿

中よりまはるはくお返のふゆあまの國咄をうり
 たる方中云左様七条御をうり元及り死
 たるあまの御守もあひ侍りし不具人
 人のやゆえんく此奉秋の新初撰の定
 家の撰入く侍まてさたりて秀逸よとそ
 りく車と侍るものもあま車まて奉り侍
 りしも侍るはあまの御守もあまの御守と
 きて上料の侍るを侍るに申上侍り
 右守の中御守興るとは侍るありと
 ふはつとる御守七車よりあまの御守に

くこも侍侍しと共可為持る由ふんめり
左秋意兼の七車めりてあつたぬまもらら
ら入てあつてまことふりも持るる侍侍し
てあつたふり圍りつりつりつりつり持
はふりて侍侍しつりつりつりつりつり

二十七番

左持

中納言

人と秋をわたりてあつたふりつりつりつりつり

右

前大政大臣

あつたふりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

古方秋人も左方と秋意とあつたふりつりつりつり
人と左方秋意とあつたふりつりつりつりつりつり
宜持と定中侍侍し
あつたふりつりつりつりつりつりつりつりつり
右方秋意ともあつたふりつりつりつりつりつり
なつたふり

二十八番

左

長雅卿

ふりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

右持

資季卿

直坂の人のゆりいりあつて我多はく死寂を乃きま
 右方の中を乃るをてえんあつてと難信
 ししきもりけ残てとや信んあうりて
 ちもたうりてとや言ふとて信連と執論
 し信んあ人の世まといとてあつて
 けしとて違は嫉妬とてわと信下とけ
 うは右方漸入真と字信りて麻の糸も
 あやう風信りてなを乃りては信りて
 とく世を守りてあはれとてあつて
 身代國も身あつてとて言ふとて有風本を信り

弁はあつてと勝とてさる

空はあつてと有るにせよとてくは右の橋

云十九番

左勝

隆親卿

左方より残てとての右かの後とて果とてはさぬ
 石

公雄卿

左方よりあつてとては信んあつて
 左方右方更を難中右左致とてさる
 五字の由をてはゆりてとて左方中ゆり
 右方も残てとてあつてとては信んあつて

の種と定らまひし方と方と
いふもあそくはむとありて
まことにのあそくありて
たゆまず守りしとたゆま
ざりて為勝

百十番

尾後

資平卿

めづるものもみらぬは
むすぶものもみらぬは

右

為教卿

かみふかしのしるし
かみふかしのしるし

左に秋うらたはむす
きと秋うらたはむす

と秋うらたはむす
と秋うらたはむす

て伝ははるるやう
て伝ははるるやう

はるるやうて伝は
はるるやうて伝は

左と傳はむす
左と傳はむす

あはるるやうと傳
あはるるやうと傳

はるるやうと傳は
はるるやうと傳は

さるるやうと傳は
さるるやうと傳は

百十番 後巻

左持

資平卿

いんせう侍もるはげなめも昔もあつる美なりきり

一石 園白

まきふれ我のまのまの美ぬりれまのぬ美なりは

昔もる世の美なりきりていほ美なり美なり

うらもるくも優なりきりてあ方もも

あつるあつてよ地持とそまもあつり

左ももも優なりきり各もも地持

平二書

左持 隆親卿

うらもるくも優なりきり各もも地持

右 前九大臣

侍もるくも優なりきり各もも地持

右秋又美れなりきり各もも地持

くも左のし持とそまもあつり

ねまもるくも優なりきり各もも地持

右持とそまもあつり各もも地持

我もるくも優なりきり各もも地持

とらもるくも優なりきり各もも地持

くも今もるくも優なりきり各もも地持

四十二番

左

前園白

其の事ははらばれ候の事あり候の事あり候の事あり候

右

資季卿

其の事ははらばれ候の事あり候の事あり候の事あり候

左の事ははらばれ候の事あり候の事あり候の事あり候

右の事ははらばれ候の事あり候の事あり候の事あり候

左の事ははらばれ候の事あり候の事あり候の事あり候

右の事ははらばれ候の事あり候の事あり候の事あり候

左の事ははらばれ候の事あり候の事あり候の事あり候

右の事ははらばれ候の事あり候の事あり候の事あり候

其の事ははらばれ候の事あり候の事あり候の事あり候

左の事ははらばれ候の事あり候の事あり候の事あり候

右の事ははらばれ候の事あり候の事あり候の事あり候

左の事ははらばれ候の事あり候の事あり候の事あり候

右の事ははらばれ候の事あり候の事あり候の事あり候

左の事ははらばれ候の事あり候の事あり候の事あり候

右の事ははらばれ候の事あり候の事あり候の事あり候

左の事ははらばれ候の事あり候の事あり候の事あり候

四十

左

右大臣

まぬくの嚙らるるに地ありていも今はむく世あり

一 右

為教卿

子あめく製な運まをけとあめくうくれあやめらん

左ありて相後よりして義理あひるるありては

宣ふあともあめく作ら成た方かしてよしもある

作らむらむいともあめくあめくもく作らむらむ

右ありあめくうらうらあめくあめくあめくあめく

あめくあめくあめくあめくあめくあめくあめく

あめくあめくあめくあめくあめくあめくあめく

あめくあめくあめくあめくあめくあめくあめく

四十六番

左持

中納言

今も又あめく人れ作らるるあめくあめくあめくあめく

右

為氏卿

あめくあめくあめくあめくあめくあめくあめく

あめくあめくあめくあめくあめくあめくあめく

後撰修徳院浄教

あめくあめくあめくあめくあめくあめくあめく

あめくあめくあめくあめくあめくあめくあめく

日ある初定仍注載之

九方まこと後を言ひゆりもたまたま又早をむけ

第十六番

九持

長雅卿

かうねむ心神のさけり首まきり心むねおしぬん

右

行家卿

たのそら人の背も成りて我身もあつたれりそ

右乃致ゆめは海も夕言候とて及の撰集

とらさる世をたゆみあつたてて夕言候

うむ身もままていつら入るおむ所は

かたらよわと被作出るうら子細よ

くといふあ太政大臣のまじりて

方乃初句うらうらひ後説くといふ

右方まさら申入物にはまじりて

くらしも難あるといふ初言す下句又後

おもひ違ひいふ左方も持もあつた

て員もあつたといふ左方も持も

おろこころまじりてのいふてまじり

てゆりてと右方中言傳いふ

右強心何能よとて言傳いふも左方中

まじりてゆりてと被定傳り

四十七番

一 反

通成卿

香物にてあまきくふ袖のきくはるを相おのふ後之非

赤橋

前太政大臣

私事今ほまおしり進球ふれははる袖ぬすむ

右方中左歌卜の事お忘れぬ袖ぬすむ

しつ方守ふおむしと申侍とて河内守

侍方袖ぬすむ事お忘れぬ袖ぬすむ

さうわしつ方守ふおむしと申侍とて河内守

方中侍しつ方も右方中侍ある難うと

勝もかざる

尤も忘れぬ袖ぬすむ事お忘れぬ袖ぬすむ

ゆととましましつ方守ふおむしと申侍とて河内守

て侍しつ方守

四十八番

左 勝

美観

うきまきつりつ方守ふおむしと申侍とて河内守

右

雅忠卿

ゆととましましつ方守ふおむしと申侍とて河内守

古事お忘れぬ袖ぬすむ事お忘れぬ袖ぬすむ

赤橋

七十二

影の存初よりよきとたのちしきりば
後よりよきも右秋津氏物徳并は
とつひいし後よりし傳りけるも南座
中出入傳りしとて員と数々あり
たの面をみよひるりし月日と西とふあふ
はうあく傳りしとておとせりしとて
以左為橋

平九事

左持

女房

いれと如建花田屋のちなれとまうりぬとみき絶ぬ

右

触覚

今おむしひまきの橋柱よかうぬとまうりぬと
とまうりぬとまうりぬとまうりぬと
たきむらほとていりかてぬとつ
つらひおとくたを方人ぬとつらひ
左とちのち傳りしとて素柱のちも
りもまうりぬとまうりぬとまうりぬと
中傳りしとてさぬとつらひと花田の事
乃持しきりぬとつらひとつらひとつらひ
ほいせとてぬとつらひ

心由事乃申送ける事の事とていへりては終り
し事なるの事とていへりては終りて持
字成つ事とて送る事とていへり

五十五番

左衛門

具氏朔日

年月とていへりては終りては終りては終り

右

公雄卿

合は事とていへりては終りては終りては終り

右の事とていへりては終りては終りては終り

とていへりては終りては終りては終り

右の事とていへりては終りては終りては終り
とていへりては終りては終りては終り

右秋合幼年之時書寫之奉歸洛之後
従政所求得之向有子細以此奉進獻
梶井宮者也仍録其由耳矣

慶長九年甲辰孟秋中七日也足軒素然

右歌合別得古寫一本校合了



羣書類從卷第二百二

